



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1989年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「好きな芸人が、一番嫌いな死に方をしたから、ちよっと腹が立ってるっていうのは事実ですよ」とラジオでコメントされたのは、明石家さんまさん。なんと愛と哀しみに満ち溢れた言葉でしょうか。どれほどこの芸人さんが、先輩後輩たちから、いや、国民から愛されているかが、多くの哀悼の言葉から伝わってきます。

タチヨウ倶楽部の上島竜兵さん

は、享年66。立て続けに僕と同年代の、第一線で活躍されていた男性が突然この世から旅立ったことに、意外なほどにダメージを受けています。明らかに50代のときとは違ってきた体力気力。だけどまだまだ自分は働き盛りだし、高齢者だなんて死んでも思われたくはない。しかし今まで必死に頑張ってきた、この先に待っている未来とは何だろう。60代とは

高齢者を笑わせる「本物の芸人」



そんな空虚さに押し潰されそうになる年代なのだと自分自身がなってみて初めてわかりました。

認知症患者でも大はしゃぎする「ヤ〜ッ!」「熱湯風呂」
さらに言えば、別離が増えていくのもこの年代。季節ごと

に、大切な人の訃報が飛び込んできます。「老いる」とは肉体的な衰えを指すだけでなく、大切な人との別れを、幾度も味わうことなのだと、これも最近気が付いたことです。長生きをするとはつまり、喪失の痛みをより多く経験することです。だったら長生きなんかしたくないなあ、もう耐えきれないなあと思う夜が誰にでもあるはずで、だから僕は酒を飲んで歌います。それでも、生きている限り朝は来る。上島さんの訃報に涙しながら、過去のタチヨウ倶楽部の映像に、声を出して笑っている自分がいる。

僕が往診に行っている高齢者施設には、タチヨウ倶楽部のファンが何人もいます。関西人は吉本・松竹びいきですが、タチヨウ倶楽部だけは別格です。言語機能が衰え、若手の早いテンポの漫才についていけない認知症の人でも、「ヤ〜ッ!」「くるんぱ!」は大好きなギャグ。熱湯風呂の映像に、大はしゃぎするおばあちゃんもいます。笑いの少なくなった高齢者を笑わせてこそ、本物の芸人だと僕は思います。

「〇〇さん、お薬を飲もうか」と言う、「聞いてないよ」と返答するおじいちゃんはお上島さんの訃報を見て、泣いていました。お笑い芸人が、年寄りを泣かせちゃだめじゃないか。それにしても肥後克広さん(59)と寺門ジモンさん(59)の追悼コメントは最高でしたね。お二人の思いを汲み、笑って見送りたい。